

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月14日現在

機関番号：87106

研究種目：基盤研究（C）一般

研究期間：2009～2011

課題番号：21520120

研究課題名（和文） アジアの木地螺鈿－その源流、正倉院宝物への道をたどる－

研究課題名（英文） Wooden Mother-of-Pearl Inlay in Asia -Trace back to the Shosoin Treasure-

研究代表者

小林 公治（KOBAYASHI KOJI）

九州国立博物館・学芸部文化財課・資料管理室長

研究者番号：70195775

研究成果の概要（和文）：

本研究では、国内5回、海外4回の調査を実施した他、海外研究者を日本に短期招聘し、セミナーの開催と国内各地の調査を実施した。

また、国内外各地で国際会議・学会での専門家を対象とした発表や、博物館一般職員やボランティア向けの講演なども実施し、成果の広範な公開に努めた。

さらに調査研究成果の一部である、正倉院螺鈿とタイ・ベトナム螺鈿との技術的類似性、唐代螺鈿貝片の加工技術、唐代螺鈿器での樹脂と漆液使い分けとその理由、といった問題点についてはすでに論文で公表しているが、内容が関係する各国でも理解されるよう、日本語以外にも中国語・英語でも公開した。

研究成果の概要（英文）：

By this grant research, we could fulfill nine research trips in Japan and in Asian countries, and could officially invited Chinese and Vietnamese researchers. With invited foreign researchers we had a seminar on the theme of Mother-of-Pearl inlay in Asia and visited some this research related areas in Japan.

In addition to the research, I had lectures on this research result not only for the professionals at international conferences, but also for the general museum staffs or volunteers.

I and research partner already published some of these research result as articles and the topics included on these papers are, technical similarity between Tang dynasty Mother-of-Pearl Inlay and Thailand & Vietnam Mother of Pearl inlay, Shell fragment processing technique of the Tang dynasty Mother-of-Pearl inlay, problem of which materials to use among natural resin or lacquer sap for the Tang dynasty shell or metal ornamented mirrors. Also these articles were published in Japanese, Chinese and English for the convenience of people concern.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：螺鈿史、アジア、木地螺鈿、正倉院、技術史、夜光貝、象嵌

1. 研究開始当初の背景

螺鈿とは貝の真珠光沢を器物の装飾に利用した技術あるいはものの総称である。6世紀頃までのその前史については、これまでほとんど研究もなく、不明点が多い。

様々な宝物類が大変良い状態で伝えられている日本の東大寺正倉院には、周知のように中国唐代に造られ、遣唐使によって8世紀に日本にもたらされた螺鈿器がまとまって存在している。それらは採用された素地による分類から、「木地螺鈿」、「漆地螺鈿」、「樹脂地螺鈿」、「玳瑁地螺鈿」の四種に区分されるが、数ある正倉院宝物の中でもその代表的な存在としてつとに知られている螺鈿紫檀五弦琵琶は木地螺鈿の一つである。

しかし、この木地螺鈿は唐代に突然のように高度な技術を持って出現し、その後の器物は中国国内にまったく確認できないため、その歴史についてはほとんど明らかとなっていない。

また日本における木地螺鈿は、平安時代以降認められるが、これらは正倉院宝物からの流れで一応捉えられるものの、それも鎌倉時代以降はごくわずかに造られていたに過ぎない状況となる。11世紀以降の螺鈿史を持つ韓国では一貫して漆地螺鈿のみが造られており、木地螺鈿はまったく認められない。

こうした中、筆者らのそれまでの調査で近現代のベトナムの木地螺鈿が唐代の木地螺鈿と基本技術を同じくし、今なお盛んに造られていることが分かっていたが、その出現経緯や歴史については不明であり、また中国古代木地螺鈿との技術的関係性などについても問題意識として俎上に上ることのない現状にあった。

2. 研究の目的

本研究はこのような上述の歴史的状況を踏まえ、アジア、とりわけベトナムにおいて19世紀に突如大流行するかに見える木地螺鈿について、その実態や広がり、変遷、技術、地域間関係、地域社会における螺鈿の位相、といった問題を、華南やベトナムを中心としたフィールド・ワークに加え、日本国内資料の調査によって検討し、アジアの螺鈿史の中に木地螺鈿を位置付けようとするものである。

またこの研究により、アジアの螺鈿を構成する主要様式でありながら、今までほとんど明らかとなっていない木地螺鈿の実態について、ベトナム以外の他の具体的な情報が得られ、正倉院に残されている古代木地螺鈿含む各地の木地螺鈿との技術的関連性につい

ての具体的な検討が可能となるのはもちろん、報告者らによる漆地螺鈿の研究結果と併せ検討することで、アジアの螺鈿史についての総合的基礎データとなることが期待できる。

今回の研究ではベトナムおよび中国国内特に沿岸地域の木地螺鈿についてその実態を知ることが当面の目標であるが、木地螺鈿は、パキスタン以西の西アジアでも造られている可能性があり、将来的にそうした地域の螺鈿についての実態研究が進めば、さらに総合的な木地螺鈿研究が可能となるだろうが、そのためにも東方アジア地域の木地螺鈿について、正確な個別データを収集することは重要である。

3. 研究の方法

本研究は、①各地域の古螺鈿器の実見を中心とした調査、②各地域の螺鈿工房における技術調査、③消費地における螺鈿の実態や使われ方といった社会的調査の大きく3つの方法で行った。

①は主に博物館、コレクターといった螺鈿を所蔵する機関や個人を訪ね、その所蔵品について熟覧、静止画撮影、場合によってはブラックライトによる蛍光反応検査、の三種の調査法を行ったもので、展示品など以外についてはあらかじめ準備した書式によりできる範囲で調書も統一的に作成した。静止画については調査対象器物の全体について把握ができるように極力全面を撮影した他、製作技術や下地構造などが分かるように、細部の拡大写真も積極的に撮影した。ブラックライトによる蛍光反応検査は、調査後半から少しずつ行うようにしたもので、本格試験というよりは、市販ライトを使った簡易試験といったものであるが、非破壊で螺鈿器に使われている塗料が漆起源か樹脂起源かを確認するためのほぼ唯一な方法であり、今後もこうした方法の積極的な導入が必要な方法と言える。

②の調査は、かつての螺鈿製作技術を知るためには現在各地で行われている技術の把握が必須であるに加え、これまでさほど積極的に行われてこなかった調査法として本研究では積極的に実施したものである。これまでに実見できた地域は、沖縄、韓国、中国、ベトナム、タイ、インドであるが、限られた時間での調査であり、より一層の調査と地域や対象内容や工房の範囲を広げた調査が必要である。

③は螺鈿の社会性を知るために必要な調査方法である。螺鈿はその材料の希少貴重性、

製作にかかる手間と時間といった側面から所有できたのは王族や貴族、あるいは富者といった地域の社会的上位層に限定されることがその通有する性格である。こうした螺鈿が社会の中でどのように所有され、使われているのかを知ることは、螺鈿の美術性の評価を超え、地域の社会史や社会学の中に位置づけるために重要な方法と言える。

4. 研究成果

本研究では、総計9回の国内外調査を実施したほか、海外研究者の日本招聘によるセミナーの開催と国内各地の調査などを実施した。また国内外各地における調査の機会なども活用し、国際会議・学会での専門家を対象とした発表に加え、博物館の一般職員やボランティア向けの講演なども実施し、成果の広範な公開に努めた。

こうした調査研究成果の一部についてはすでにいくつかの論文で公表しているが、その主な論点は、正倉院宝物の螺鈿とタイ・ベトナム螺鈿との技術的類似性、唐代螺鈿貝片の加工技術、また唐代の樹脂と漆液使い分けの可能性とその理由等であり、またそれが関係する各国で多くの人々に情報が理解されるよう、日本語・中国語・英語によって公表した。

以下、こうした研究成果について略述したい。

(1) 国内外での調査

本研究で実施した調査等は、H21年度は日本国内では、名古屋・沖縄・東京、国外ではマレーシアの4回、H22年度はベトナム・インド・タイの1回、H23年度は日本国内では、関西・長崎、国外では中国、ベトナムの4回行い、各年度合計では日本国内5回、国外4回の総計9回行った。

これらの調査では、ベトナムの木地螺鈿を中心とした作品調査と北部を中心として現在行われている製作技術や工程などについて確認した他、現在ではその実態がはっきりしない中国の浙江省から福建省にかけて清代以降行われた木地螺鈿について具体的製作地の把握などができた。また技術的には木地螺鈿とほぼ同様であるが、貝ではなく骨によって器物の製作を行う木地骨象嵌が木地螺鈿と親縁性を持っていることなども確認された。さらに世界的にもほとんど知られていないインドの螺鈿工房を訪れその製作技術について確認した他、タイにおいても現在極めて数少なくなかなか実見することが難しい螺鈿工房で実際の作業を調査できた。日本国内の調査では、各地の博物館や美術館が所蔵する唐代の螺鈿鏡類からアジア各国の螺鈿器についての作例調査と沖縄での螺鈿

工房調査など幅広い調査が実施でき、文様貝片の切取加工技術など、木地螺鈿についてより広い視点から検討することができた。

(2) 海外研究者の招聘

2010年2月から3月にかけて中国およびベトナムの研究者を日本に招聘した。また同時に他経費により招聘したアジア各国の研究者と共に「アジアの螺鈿セミナー」を九州国立博物館にて開催し、招聘研究者各氏には各地での木地螺鈿や漆工に関する研究発表いただいた。

また各氏とは、平泉中尊寺、二戸市浄法寺地区、沖縄県内美術館、博物館、また螺鈿工房などを調査し、日本の知見を深めていただくと同時に、各地の研究者なども含めた様々な意見交換などを行った。

(3) 論文等による研究成果の公表

本研究の結果については、これまで下記のように6件の論文を通じて公表してきた。

①は、東京で開催された漆に関する国際会議での発表概要であるが、唐代の螺鈿製作技術について広い視点からの検討の一つとして、装飾鏡から螺鈿鏡と平脱鏡を比較し、螺鈿鏡には樹脂が、平脱鏡には漆が使い分けられている可能性とその理由について概述した。

②は、代表者と分担者が先般入手したベトナム螺鈿について、意匠的な視点からその意味について紹介・検討を加えたものである。

③においては、中国の殷周代から清代までの螺鈿史の中から、6つの問題点について取り上げ、検討すべき課題と一部解決の方向性について論述した。特に木地螺鈿に関しては、唐代螺鈿の起源と系譜に関する予察、唐代以降、清代になって出現するらしい中国浙江省や広東省での家具を中心とした木地螺鈿の紹介、あるいは清代木地螺鈿輸出と華僑の関係、また東南アジアや南アジアの螺鈿と中国螺鈿との技術的相関性などについて論じた。

④は、これまで簡略な紹介に留まっていたベトナムの螺鈿について、博物館やベトナムの個人が所蔵するコレクション調査、北部・中部・南部の各地域にある螺鈿工房の調査、宗教施設や伝統的所蔵者の調査などによって得られたデータによるベトナム螺鈿についてのおそらくベトナムを含む世界でも初めての総合的ベトナム螺鈿の報告である。

⑤も、バンコクで開催された漆に関する国際会議での基調講演要旨であり、タイの螺鈿技術と唐代螺鈿技術との類似性・相関性について論じた。

⑥は世界的にも研究者が少なく、極めて低調な研究状況にあるアジアの螺鈿について、技術的な視点からの重要性について述べた

ものである。

(4) 国内外での講演

各講演内容は、上記の(3)で述べた調査成果について各地で撮影した画像や図などを交えて具体的かつ分かりやすく発表したものであるが、これらは、①2012年明治大学主催の「漆サミット2012」、③2011年に西安で開催された中国生漆塗料研究所主催「国際生漆産業発展サミット会議」、⑤2010年バンコクでタイ王室シリントーン王女ご臨席の上で開催された「シリントーン王女主催、タイの知恵を再活性化するための東方アジア漆研究国際会議」、といった専門の会議に加え、②ハノイのベトナム国家歴史博物館主催で2011年に開催された本研究報告会、④2010年にバンコクで行われたバンコク国立博物館日本人ボランティア研修会、といった専門家以外を対象とする一般の方々に対しても積極的に行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 小林公治、唐代装飾鏡製作技術の検討—漆と天然樹脂使い分けの可能性を中心に—、「漆サミット 2012」講演要旨集、査読無、2012、p.16、
- ② 猪熊兼樹、ベトナム螺鈿の器物資料に関する知見、東風西声、九州国立博物館紀要、査読無、第7号、2012、pp.111—116、
- ③ 小林公治、中国螺鈿史研究状況と課題—以亜州螺鈿史建設為目標(中国語)、中国生漆、査読無、第30巻第3期、2011、pp. 4-13、
- ④ 小林公治、ベトナムの螺鈿—生産・製品・消費に関する調査研究報告—、東風西声、九州国立博物館紀要、査読無、第6号、2011、pp.42—74、
- ⑤ Koji Kobayashi、Mother of Pearl Inlay of Thailand and Eastern Asia - from a view point of mutual relationship、International Conference “Study of Oriental Lacquer Initiated by H. R. H. Princess Maha Chakri Sirindhorn for the Revitalization of Thai Wisdom, preliminary report”、査読無、2010、p. 16、
- ⑥ 小林公治、アジアの螺鈿について—近年の調査結果を中心に—、九州国立博物館国際セミナー アジアの螺鈿 予稿集、査読無、2010、pp. 1-5、

[学会発表] (計5件)

- ① 小林公治、唐代装飾鏡製作技術の検討—

漆と天然樹脂使い分けの可能性を中心に—、漆サミット2012、2012年1月13日、東京・明治大学、

- ② 小林公治、ベトナムの螺鈿—生産・製品・消費に関する調査研究報告、ベトナム国家歴史博物館(ハノイ)主催講演会、2011年11月21日、ベトナム・ハノイ、
- ③ 小林公治、中国螺鈿史研究状況と課題—以亜州螺鈿歴史建設為目標、国際生漆産業発展サミット、2011年8月20日、中国・西安、
- ④ 小林公治、タイと東方アジアの螺鈿—相互関係の視点から—、バンコク国立博物館日本人ボランティア研修会における講演、2010年9月29日、タイ・バンコク、
- ⑤ Koji Kobayashi、Mother of Pearl Inlay of Thailand and Eastern Asia - from a view point of mutual relationship、International Conference “Study of Oriental Lacquer Initiated by H. R. H. Princess Maha Chakri Sirindhorn for the Revitalization of Thai Wisdom、2010年6月20日、タイ・バンコク、

[図書] (計1件)

- ① 小林公治編訳、九州国立博物館、国際セミナー アジアの螺鈿 予稿集、2010、30、

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 公治 (KOBAYASHI KOJI)
九州国立博物館・学芸部文化財課・資料管理室長
研究者番号：70195775

(2) 研究分担者

猪熊 兼樹 (INOKUMA KANEKI)
東京国立博物館・学芸研究部列品管理課貸与特別観覧室・主任研究員
研究者番号：30416557

(3) 連携研究者

原田 一敏 (HARADA KAZUTOSHI)
東京芸術大学・教授
研究者番号：20141989